



Title	教育学部の将来構想にかかわって
Author(s)	須田, 勝彦
Citation	教授学の探究, 5, 171-175
Issue Date	1987-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13547
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_p171-175.pdf



〈資 料〉

以下に掲載するのは、1986年11月に開かれた北大教育学部研究計画委員会主催の「教育学部フォーラム」における発言の要旨である。

教育学部の将来構想にかかわって

須 田 勝 彦
(北大教育学部)

0 求められていること

ここで求められていることはおそらく、城戸構想が崩壊した後しばらく続いた、各専門領域における研究方法の確立の時期、あるいは専門分化の時期をいかに転換させるか、ということだろうと思います。これは大変難しい問題のように見えますが、私にとっては、はなはだ簡単であります。専門分化の次にくるべきものは統合でありまして、それは問題自身の中に含まれている答のようなものです。実際、私のいいたいこと、結論も実はその通りのことですので、もう話をやめていいわけですが、少しだけ中身をつけ加えてみます。

1 いくつかの論点

ポスト・城戸構想の次にくるべきものを考えるときには、城戸先生の出されていた論点を用いるのも有効かと思しますので、私なりに重要と考えるポイントをひろいだしてみました。

第一は、教育科学をどのように構想するか、という問題で、これについて城戸先生は「社会の発達を人間に集約して研究する科学」である、とのべられております。第二は、実践、あるいは価値とどのようにかかわるか、という問題です。これについては「教育は一つの社会的事実にはかならない。教育科学が規範学としての教育学に対して一つの法則科学として認められる根拠もここにある。しかし……事実としての教育のうちには、立場としての教育が含まれている」と書かれています。規範と事実を峻別しながらも、教育科学は本質的に価値の実現と無関係ではありえない、ということかと思えます。第三は、研究の方法としての「問題」の問題です。「立場としての教育はその行き詰りから問題としての教育を発見してくる」「教育科学は問題の解決法」というような、特徴のあるいい方がなされていました。第四は、私のかかわっている教授学のことです。城戸先生は「教科に関する知識の発達を問題とするならば、教授学は学問の学問」である、とおっしゃられています。これら四つの論点について考えることにします。

2 「問題」について

「教育科学の問題の解決法」といういい方をはじめて聞いたとき、私は、それは違うだろう、と思いました。「問題」ということばは否定的イメージにまみれているのです。否定的イメージ

の由来を考えてみましょう。まず、明治の10年代、「数学三千題」という算術教科書が大変流行しました。心ある人はそのような「問題をとく」ことが自己目的化した数学の流行を病気と考え、直すことに努力しました。わが国の算数・数学教育は、三千題流の克服を通してその基礎を確立したのです。

記憶に新しいところでは、「問題解決学習」というのがありました。知識の教授よりも、実践的問題解決力の形成に力点をおいた、戦後のプラグマティズム教育論です。三千題流にしても、問題解決学習にしても、いずれも基礎的理論から分離された問題解決、あるいは基礎的理論そのものの不在、という根本的な欠陥を持っていたのです。

しかし、一般に、科学研究における「問題」の位置という問題から考えてみましょう。数学の領域では、D. Hilbertの1900年のパリ講演「数学の問題」がたいへん有名です。新しい世紀をむかえるにあたって、ヒルベルトは23個の問題を提出し、世界の数学者がそれらの問題にとりくみました。まだ解かれていない問題もありますが、これによって数学の世界全体が、大きな飛躍をなしとげたのです。問題の役割についての、彼のことばを紹介しておきます。「定式化された問題が数理科学全般の進歩に対して高い価値をもち、何人もの学者の業績に重要な役を果たすことは疑うべくもない。科学のある分野が豊富な問題を提供する限り、それは生命に満ちあふれている。問題の欠乏は死を、すなわち独自の発展の停止を意味する。一般に人間の事業はすべて、ある目的を達成することであると同様に、数学の研究には問題が必要である。問題を解くことによって学者の腕はきたえられる。研究者はそれを通して新しい方法と新しい見地とを発見し、以前よりも広大で自由な地平線に達する。」

そして彼は、数学における問題の源泉を、次の二つのレベルにわけていることは、私たちにあって大変示唆に富んでいるように思われます。「最初のそして最古の問題は経験からきたもので、外部の世界を通して刺激をうけたものである。」整数の演算の規則や幾何学も、最初はこのようなレベルの問題から生まれているし、微積分学、変分学、フーリエ級数論などの最初の問題も同様です。「しかし数学的訓練が発展するにつれて、人間の精神は解の発見に刺激されて、独立性を意識するようになってきた。それはしばしばはっきりした外部からの刺激なしに、論理的な組み合わせとか、一般化、特殊化、概念を分割したり併合したりすることなどだけによって、新しいのみり豊かな問題を、最も幸運なやり方で自分みずからつくりだし、前景中の問題とするようになった。」これが第二のレベルです。

私たちの学部の実状を見るならば、やはり問題と基礎的理論との分離、そしてこの場合には「問題」を欠いた「基礎」のひとり歩き、という事態を指摘できると思われます。しかし、これは決して怠慢に帰因するものではなく、教育問題の困難さに由来する、ひとつの賢明な選択であったことは認めねばなりません。

実際、臨教審の諸議論を待つまでもなく、教育問題は教育評論家（それを職業とするか否かを問わねば、日本に少なくとも1億人くらいはいるだろうと推定される）たちによってあらゆる角度から指摘されており、しかも、そのどれひとつといえど、これまでの教育に関する研究にもとづいて解決できそうなものは存在しないのです。「受験地獄」とか、「非行」とかいわれている問題にしても、私たちにできることは「少年Aをある大学に合格させるに有効なアドバイスをした」とか「少年Aをしっかりとつけた」とか「少年Aをけしかけた」ということぐらいではないかと思えます。それが研究と無関係であることはいうまでもありません。

実践、あるいは価値の志向はそれ自体としては研究と無関係です。しかし、だからといって、

ヒルベルトのいう第一のレベルの問題をたてることを回避するのは、科学的研究方法の資格を失うことになるでしょう。解決可能な問題を立てることは、絶対的に不可能であるとはいえないのです。それを次に、教授学の領域を例にして考えてみます。

3・教授学について

わが国の教授学研究の動向は省略して、私たちのグループの活動に限定します。私たちのグループの方法と価値志向について、大まかにまとめると次のようになるでしょう。まず、戦前、小倉金之助、戸坂潤らによって提出された、ファシズムに対抗するキー概念である「科学の大衆化」というテーゼを現代的な問題状況の中で実現して行くことを実践的な課題としています。それは大きな流れからいえば、古典教授学のガイストにも通ずるものがあるわけですから、その継承、批判が大きな問題となります。そのために、当面は教科の具体性に即して研究を進めているわけですが、教科を超えた共通の問題についても時々、研究グループの内部で提出されます。そしてそれらは、ただちに忘れ去られます。

それは、どう論じてみても、教科の具体性に即した研究にくらべて「科学的」ということばからかけ離れすぎているからでしょう。長い歴史を通じて、「学問」はいく段階もの成長・発展をとげているにもかかわらず、「学問の学問」は未だ学問になっていないことを認めねばなりません。しかし、学問は難しいのだから学問の学問はもっと難しい、などといって済ますことはできません。いかに教科に特化しようと、すべての学問に何らかの哲学的背景があるように、教科教育研究の背景には、仮に空白未定であるにしても、教授学、または学問の学問が存在しているのですから。

今日の「フォーラム」は、たとえばこのように、言うべきではあるがまだまだ言えないことを、無理やり口をこじあけて言わせようとする企画なのでしょう。従って私なりに考えている教授学=学問の学問を、教育科学=社会の発達を人間に集約して研究する科学、の一領域として示さねばなりません。そこで、歴史的・社会的存在としての人間、という視点から見た、数学及び文化的諸価値について、整理を試みたいと思います。普通はこれは大変難しい問題なのでしょうが、私にはこれまたきわめて簡単でした。私の知っていることをすべて書き出してみ

年	社会	文化的価値の創造		
		数 学	諸科学・技術	文化・芸術
A	-10 ⁵ 狩猟生活	数 (集合、対応、リズム性)	石 器 土 器	絵画、音楽、スポーツ 口承文学
	-10 ⁴ 農耕生活			
B	-10 ³ 国 家	幾何学	天文観察 土木工事	書かれた文学 哲学
	封建社会	商業算術・代数		オリンピック
	フランス革命	解析学	ニュートン力学 産業革命	パッパ 透視画法
	パリ・コムニオン	射影幾何	経済学 エコロジー	
C	-10 ² ロシア革命		相対論・量子力学	
	ファシズム	ヒルベルト ブルバキ		
	原爆投下	反ブルバキ	技術革進	開高健・大江健三郎
	-10 ¹		マイクロコンピュータの普及	井上ひさし

ると、上のような表に納まったのです。

まず、書かれた歴史の時代Bと、それ以前の時期Aが区別されます。現代Cは、Bと区別しきれない点も多いかと思いますが、私たち自身の主体的責任に属するという意味でも区別が必要でしょう。このような時期区分をもとに、気のついたことを列挙してみます。

- (1) Bの初期においては幾何学が、後期には物理学が、科学の王者であると考えられた。数学は後期には、代数・解析・幾何の分科秩序が確立する。
- (2) 現在の学校では、おおむねBの時期につくられたことがらが教科内容の中心になっている。
- (3) 人間のハード面はおおむねAの時期に形成された。Cの時期には必ずしも適合した機構ではないことが、様々な局面で問題になっている。
- (4) Cの文化はBの自然な延長・発展であり質的な区別はないと考える人がいる。世界観としては近代主義もその一種であるが、今日のわが国の教育はなぜか、それを自明な前提として承認しているように思われる。
- (5) それは根拠のないことではない。Bは、人類の生活を飛躍的に発展させた。
- (6) 同時に、破滅に至らしめる諸条件をつくりだした。核戦争の危機、森林の破壊、公害など枚挙にいとまがないが、Bの時期を特徴づける「国家」も、ファシズムというその特殊形態などにおいて、人類を破滅に至らしめる一条件である。
- (7) (1)の意味における「科学」の意味は、Bの時期にそれを否定する芽を形成しながら、Cの時期に根本的に変更される。数学においては画法幾何から射影幾何が発展し、非ユークリッド幾何を含めた幾何学の群論的統一を可能にする。分科秩序の崩壊の時期に、しかも「数学の危機」をむかえるまさにその時期に、新しい指導理念としての公理主義が提唱される。自然科学では、仮説—実験—検証といった手続きとは質的に異なったものとしてエコロジーが成立し、次第にその重要性を増す。無論、仮説—実験—検証の方法の重要性が減じたわけではない。
- (8) 社会科学では残念ながら、19世紀の著作を解釈するにとどまっている研究がしばしば見られる。
- (9) 心理学では残念ながら、物理学のスタイルを模倣することが最重要視される研究がしばしば見られる。
- (10) 現代の歴史的課題は全体として、Bをいかに否定もしくは止揚するか、という点にある。核兵器の廃絶は緊要であり、国家の止揚は長期的課題であろう。
- (11) 教授学においても同様にBをいかに否定もしくは止揚するか、その中でAをいかに復権させるか、といった問題が、カリキュラム論として検討されるべきだろう。その研究方法としても、幾何学や物理学を科学の王者とする見地とは異なった、新しいスタイルの確立が模索されるべきことは当然である。

4 まとめにかえて

教授学の課題を上のように整理してみますと、実践とのかかわり、価値志向の点では言うまでもなく、研究方法やその背景にある学問観、科学観などにおいて、他の研究グループと多くの共通部分を持っていることがわかります。共通部分は無論、一致という形よりはむしろ、厳しい対立という形で存在しているのだらうと思います。このような共通部分をより顕在させて

行くためにも、まずは実践への問題関心、価値実現への志向において何らかの討議を起して行くことが必要でしょう。ヒルベルトのいう問題の源泉の第一のレベルは学部のインテグレーション実現の必要条件なのです。

これらのインテグレーションの動きが具体化し、部分的にせよヒルベルトのいう第二のレベル、つまり「論理的な組み合わせとか一般化、特殊化、概念を分割したり併合したり」といった理論の構築が可能となった状態が生ずれば、教育科学について論ずることは無意味ではなくなるでしょう。